

チャイコフスキー国際コンクール第6回大会 優勝

ナサニエル・ローゼン チェロコンサート

2013年 **12/6** (金)

サントリーホール ブルーローズ (小ホール)
〒107-8403 東京都港区赤坂1-13-1 TEL 03-3505-1001

開場 18:30 / 開演 19:00

チケット ¥5,000

主催：ワミレスコスメティックス(株)
制作：SUNデザイン研究所
制作協力：(株)メイ・コーポレーション

● PROGRAM

C. ドビュッシー チェロとピアノのためのソナタ

C. Debussy Sonata for cello and piano

L. v. ベートーヴェン チェロとピアノのためのソナタ第3番イ長調 作品69

L. v. Beethoven Sonata for cello and piano No.3 in A Major op.69

C. フランク チェロとピアノのためのソナタ

C. Franck Sonata for cello and piano

※都合により曲目が変更される場合がございます。予めご了承ください。



Nathaniel Rosen Cello Concert

ナサニエル・ローゼン

1948年カリフォルニア生まれ。

アマチュア・ヴィオラ奏者の父のもと、6歳からチェロを始める。

13歳で、伝説的なチェロ奏者グレゴール・ピアティゴルスキーに師事。

1977年アメリカ、ヌーンバーグコンクール優勝を機に米国内デビュー。

ピッツバーグ交響楽団の首席チェリストに就任。

1978年第6回チャイコフスキー国際コンクールでアメリカ人初のチェロ部門第1位を受賞し世界的名声を勝ち得た。

ロサンジェルス・フィルハーモニックを始めとして、世界一流のオーケストラ(ニューヨーク・フィルハーモニック、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団等)にソリストとして招かれている。

インターロッケン夏期室内楽音楽例祭の芸術監督、アラスカ・シトカ夏期音楽祭の創始者の一人でもある。演奏家としてはもとより、教育者としても活動。ダラス市のサウスメソジスト大学、ニューハンプシャー州トマス・モア自由芸術大学、マンハッタン音楽院にて教鞭をとる。現在は2010年に結婚した日本人の妻とともに山梨県山中湖に在住。



ピアノ：田崎 悦子

Etsuko Tazaki

20世紀の大指揮者ゲオルグ・ショルティに認められ、シカゴ交響楽団定期演奏会のソリストとして数回にわたり共演した、日本人ただ一人のピアニスト。桐朋女子高校音楽科を卒業後、フルブライト奨学金を得てニューヨーク・ジュリアード音楽院に学び、その後30年在住、国際的に活躍する。これまでに共演した指揮者は、ショルティ、サヴァリッシュ、スラットキン、プロムシュテット、小澤征爾など世界の巨匠達である。日本ではN響をはじめ、主要オーケストラと共演のほかソロピアノの18世紀から21世紀までのレパートリーを縦断する6回シリーズ「田崎悦子ピアノ大全集」を完奏、その魂を揺るがす表現法は常に独創性と鮮烈なピアニズムで聴くものの魂を揺るがし続けている。

お問合せはワミレスコスメティックス株式会社 045-847-0001

Nathaniel Rosen Cello Concert

ナサニエル・ローゼン チェロコンサートに寄せて

音楽への愛情が溢れ出る表現力

香り立つ優雅なヨーロッパ風のフレージング、自在なテクニック、語尾の隅々までに、音楽への愛情が溢れ出る表現力・魅惑のチェリスト、ナサニエル・ローゼン。

その音楽的バックグラウンドを知り、彼の音楽の根源がより明瞭になった。戦後のカリフォルニアにはヨーロッパから偉大な芸術家達が集結した。13歳からピアティゴルスキーにチェロの指導を受け、同時に伝説のあのハイフェッツと共に室内楽の演奏をしていたという。小品はハイフェッツの真骨頂と言われたが、ローゼンの小品集はため息が出る程に美しい。まさにチェロの詩人である。

アメリカで共演を重ねた卓越したピアニスト田崎悦子と共に選んだプログラムは意欲的である。CDで聴く彼のドビッシューの「ソナタ」は、この散文詩をドラマチックに色彩豊かに表現し、ベートーヴェンの「ソナタ第3番」は、細部に彼自身の特徴を聴くことができる。中でもアダージョ・カンタービレの優美さは、その最たるもの。最後の曲は、フルニエが愛したフランクの「ソナタ」。恐らく彼が今、田崎と一緒に演奏したい作品なのだろう。偉大な二人の音楽家の演奏を、小さな空間で真近に体験できるのは贅沢の極みである。

眞鍋圭子(音楽プロデューサー)

チェロを自在に歌わせる数少ないチェリスト

不覚にも私は、ローゼン氏のことは知らなかった。彼はアメリカに生まれ、名チェリスト・ピアティゴルスキーに師事し、チャイコフスキー国際コンクールのチェロ部門で、アメリカ人としてはピアノ部門でヴァン・クライバーン氏が優勝して以来、二人目の優勝に輝いた実力の持ち主である。ピッツバーグ交響楽団の首席チェリストを経て、ニューヨーク・フィルやチェコ・フィル、ロンドン交響楽団など、世界のオケとの共演を果たしている。彼ほどの実力とキャリアの持ち主を招聘することはなかなか難しいことだが、聞けば日本人の奥様と結婚され、山中湖の近くにお住まいとのこと。となれば、今後、彼の演奏を耳にする機会はぐっと増えるだろう。私たち日本の聴衆にとって、これはとても幸せなことだといわねばなるまい。

人間の声にいちばん近い楽器といわれるチェロを自在に歌わせることのできるチェリストは少ない。これからの彼の活躍がほんとうに楽しみである。

三枝成彰(作曲家)

ナサニエル・ローゼン、日本で第2楽章!

日本で「団塊の世代」といえば数にたのんで他を押し、押し出して競争社会を生き抜いてきた印象が強い。ましてや太平洋の向こうのベビーブーマー期、1948年に生まれ、78年のチャイコフスキー国際音楽コンクールのチェロ部門で第1位を獲得した初のアメリカ人となればさぞ、エネルギーな演奏を繰り広げると、勝手に思い込んでいた。確かに師グレゴール・ピアティゴルスキーを彷彿とさせるグランドマナーの持ち主で、スケールは大きい。日本製の新しい楽器から豊麗な響きを引き出し、旋律をたっぷりと歌わせる。だが「作品の上に立つ」不遜さはかけらもない。音楽への愛情をしみじみ、人懐っこく語りかける姿からはむしろ、いにしへの日本人の美德が思い出される。キャリアの最終コーナーで日本に居を構え、私たちの前で再び弾き始めたことには、何か、深い縁を感じる。

池田卓夫(音楽ジャーナリスト)

楽器に力を発揮させ場の音響を味方に

山中湖畔に暮らす米人チェロ奏者、ナサニエル・ローゼンの「今」を聴く集いに足を運んだ。思ったよりも小柄な演奏家なのにこやかに舞台上上がる。一呼吸おいて弾き始めたチェロの音に驚かされた。音がとても大きい。楽器が豊かに鳴っているのだ。耳を圧する不快な大音量ではない。チェロそのものの佳さはもちろん、演奏家が楽器の実力を充分に引き出している。弓を持つ右手首の柔らかさがなせるわざだろう。さらにホールがチェロの一部のように響く。楽器に力を発揮させ場の音響を味方につける。おおらかな響きの裏には技と計算とが働いている。心の動きがポルタメントとして表れるロマンティックな演奏にはどこか懐かしさも。整然とした奏法が主流の現在、この個性は際立っている。この日のチェロは日本製。気候を読んだ楽器選択が湿気た空気にもしなやかに対応する。日本の四季も音にするしたたかさ。単なる舶来とはひと味違う「朗善さん」の活躍に期待したい。

澤谷夏樹(音楽評論家)